人文フォーラム

23

2005.8

CONTENTS

巻頭言
新たな模索と挑戦へむけて
人文学部長　桑原　俊一…… 1

Essay
藻岩山雑感
日本文化学科助教授　郡司　　淳…… 2
2枚の『アルプスを越えるボナパルト』
英米文化学科教授　浜　　忠雄…… 4
地に足をつけて歩みたい私
文学研究科 日本文化専攻 修士課程2年
鈴木真理子…… 6

新任教員紹介
英米文化学科教授　大塚　秀之…… 7

第2回日本文化演習
研修旅行 冬来たりなば春遠からじ…… 8

研修旅行の思い出
2年J1組　雉子谷麻美…… 9
2年J1組　吉田　蕗衣……11

ゼミ室紹介
2部 日本文化学科 小野寺ゼミナール……13

大学院の窓
二年周期の「進化」と『年報 新人文学』の誕生
日本文化学科教授
テレングト・アイトル …… 14

研究、その足跡 …… 15

人文学部第9期生
卒業論文・卒業研究題目一覧 …… 17

編集後記 …… 21

北海学園大学人文学部

巻頭言

新たな模索と挑戦へむけて

人文学部長　**桑原　俊一**

平成17年度の時の扉が開かれ、また新たな模索と挑戦が始まった。時はわたしたちを寄せつけない巨大な存在でありながらも、わたしたちに必然的に刻み込まれてゆく。わたしたちは今を生きる時の共有者であることを自覚し、この今を教職員も学生諸君もわたしたちに何ができるか真剣に考える契機としたいものである。

人文学部は第9期生を世に送り出し、新入生を迎えた。新たに教員として大塚先生（米国文化論等）をお迎えし、懸案だった新カリキュラムもいよいよ始動した。確実に新たな第一歩を踏み出した。それはまた新たな模索と挑戦の始まりでもある。

時は明治維新の翌年1869年のこと、模索と挑戦に挑んだ一団があった。戊辰戦争に負け、会津藩から遠い太平洋を渡り、逃げるようにしてやってきた日本人の集団である。発案者はジョン・ヘンリー・シュネル（John Henry Schnell）という会津藩お抱えの武器商人で、新天地アメリカに日本人村を建設しようと計画したのである。彼は敗戦により前途を失った武士とその家族を説得してやって来た。日本人妻と娘、子守〝おけい〟も加わっていた。サンフランシスコに到着した一行は、サクラメント川を上り、その北東にあるゴールド・ヒルに向かう。シュネルは農地600エーカーを5千ドルで買い取り、〝若松コロニー〟を建設した。青い空と乾いた空気のこの土地で、茶と桑、また米も栽培するつもりだったようである。しかし、日照りや資金不足のためか、このコロニーは約1年僅かで行き詰る。1871年、シュネルは日本で金策をして戻って来ると言い残しこの地を去り、二度とゴールド・ヒルに戻ることはなかった。途方にくれた日本人入植者はその後、各地に散り、やがて忘れ去られていった。それから40年後のこと、日本人移民がカリフォルニアに増えつつあった1915年、ゴールド・ヒルの草むらで一つの墓石が発見された。そこには日本語で「おけいの墓」、英語で「The Memory of Okei. Died 1871, Aged 19 Years. A Japanese Girl」と書かれていた。これこそが若松コロニー存在の唯一の証であった。挫折と見えた彼らの模索と挑戦の歴史は、現在ゴールド・ヒルに近いサクラメント近郊を米国有数の稲作地帯にすることで残されている。カリフォルニア産米は高い評価を受け全米の日本食を支えている。

大学の4年間は模索と挑戦の日々であろう。無謀と思える挑戦も大学では必要である。なぜなら大学は学生に与えられた大きな実験場であるからである。〝自分を発見する〟模索と挑戦は継続によって始めて力を得る。まずは踏み出そう。新たな挑戦に向けて。

Essay

藻岩山雑感

日本文化学科助教授　**郡司　淳**

札幌に住んで1年と数カ月が過ぎた。

マンションの10階にある我が家の窓からは、西南の方向に藻岩山を眺めることができる。1年間住んだ中の島のマンションから、豊平川を越えて中央区にやってきたので、その山肌はさらに間近に迫って見えようになった。また西北には、手稲山や札幌国際スキー場のある山々が望め、山頂に残された残雪が5月の終わりまで我が家に涼風を運んできた。

東京に生まれた私は、まもなく千葉県の我孫子に移り住み、以来そこで暮らしてきた。40年近くの歳月を、関東平野のただなかに住まいしていたことになる。この北総の地をはじめ、南関東の各地には、人々の敬虔な生活と信仰のありようの一端を物語るように、「富士見」という地名が随所に残っている。富士見坂、富士見台……、我孫子のかつての我が家の近くにも、富士見橋という小さな橋があった。平野が広がる南関東では、遠く地平線上に富士のお山を望むことができるからである。逆に言えば、関東平野では、日本の最高峰である富士山以外、山の風景に接することは稀である。

したがって、私にとって、現在のように山を間近に生活する日々は、40歳半ばにして初めての経験となった。しかし、あらためて考えてみると、日本では山を身近に暮らすことの方が、むしろあたりまえのことなのである。私の両親が生まれた鹿児島では、桜島をはじめ開聞岳、霧島など、変化に富んだ山の風景には事欠かない。義理の姉は、富山に住み、春先の晴天の日には雪をいただいた立山連峰が雄姿をあらわす。つまり、日本列島のなかで最大の平野である関東平野からの眺めは、日本の風景のなかではごく例外的なものなのである。そもそも日本列島に住む人々が、生産と生活の舞台を大河川中下流域の平野部に移すのは、戦国時代末期から江戸時代初期のことである。その以前、山は日本人の生活の中心的場であり、ごく近年まで様々な生活の資を与えてくれる欠くことの出来ない存在であった。といったことが、札幌に移り住んで、日々藻岩山を眺めることで、今更ながらに実感しえたのであった。まさに「井の中の蛙」ならぬ「平野の中の土竜」である。

革命は人をして理想主義に走らせる。これは、革命の主体となるものが、比較的若い世代であることにもよろう。明治2年の北海道開拓

豊平川から見た藻岩山

使の設置に始まる札幌の建設は、肥前出身の初代開拓使判官島義勇により、中心に 300 間（約 540 メートル）四方の本府庁舎を設け、東は豊平川、西は円山の麓にいたるという壮大な都市づくりが目指された。その都市計画は、南北を北 6 条から南 7 条、東西は東 3 丁目から西 9 丁目までとして、これを 60 間（108 メートル）ごとに幅 11 間（19.8 メートル）の道路で碁盤目状に整然と区画し、北西部に官庁と学校、北東部に官営工場、南西部に町屋と住宅を各々配し、水運の恵まれた南東部には流通の拠点と宿泊施設を置くというものであった。この島が、大友堀（現、創成川）と銭函道（南一条通り）を南北・東西の基線とし、両基線が交差する創成橋を本府の中心に定めたのは、当時コタンベツの丘と呼ばれた円山の頂からであったという。

藻岩山から望む札幌市街地

河水遠流山峙隅
平原千里地膏腴
四通八達宜開府
他日五州第一都

島が円山から東方を望み、詠んだとされるこの漢詩の想は、まさに高みから俯瞰する視線でこそ、得られたものであったといえようか。

しかし島判官は、本府建設に多額の経費がかかったことで、わずか三カ月余で罷免され、後に佐賀の乱で刑死、志半ばでその生涯を終える。それでもなお、「五州第一の都たらん」とした島の夢は、彼の後任の岩村通俊や開拓次官黒田清隆へと引き継がれ、現在、187 万の人口を擁する北の都に成長することで、実を結んだのであった。北海道神宮の神門そばと、札幌市役所 1 階ロビーに、島の銅像が置かれているのは、彼の功績を札幌市民が認めているからこそであろう。

藻岩山のロープ・ウエイに乗り、眼下を眺めると、札幌の市街地が一望に見渡せる。島義勇が建設した札幌本府に、我が家のマンションがある山鼻村、学園のある豊平村、札幌神宮のある円山村などの旧村々が、現在では大小・高低のビルディングが建ちならぶ大都会となって広がっている。かつて、島が革命の理想に燃え、山頂に佇んだであろう円山は、その倍の高さをもつ藻岩山から眺めると、市街地に突き出た形で丸い山姿を見せている。

幸いにも、天から時間を与えられた私は、これから山を降りて、北の大地で営まれた人々の生活の歴史にわけはいっていきたいと考えている。

2枚の『アルプスを越えるボナパルト』

英米文化学科教授　浜　忠雄

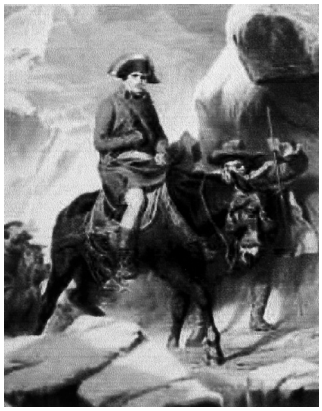
ジャック・ルイ・ダヴィッド画『アルプスを越えるボナパルト』(1801年)は、ナポレオン・ボナパルトが1799年にアルプスを越えてイタリアへ進軍したときの様子を描いたものです。中学校の歴史教科書にも載っていますから、知らない人がいないくらいに有名な作品でしょう。

同じ『アルプスを越えるボナパルト』の題の絵をもう1枚挙げます。ポール・ドラロッシュの作品(1852年)です。

この2枚の絵は同じ主題を描いていますが、まったく対照的です。1995年秋に札幌の五番館西武デパートで催された『ナポレオンとジョゼフィーヌ―フランス国立博物館展』で、この2枚が並んで展示されたことがありましたので、その違いがよく分かりました。

まず、大きさがまるで違います。ダヴィッドのは縦282センチ横243センチという圧倒的な大作ですが、ドラロッシュのはその7分の1ほどの小品です。ダヴィッドの作品は猛る白馬に跨るナポレオンの颯爽たる勇姿です。一方、ドラロッシュのは颯爽たる勇姿と言うわけにはゆきません。ただ、この絵の見方は簡単ではなく、福音書に記され絵画にも繰り返し描かれたことのある、受難を覚悟でロバに乗ってエルサレムを訪れる救世主の姿と重ね合わされているという解釈もあるようです。しかし、私たちには疲れ切った様子の冴えないナポレオンに見えます。「英雄ナポレオン」のイメージからはほど遠いでしょう。

ダヴィッド『アルプスを越えるボナパルト』



ドラロッシュ『アルプスを越えるボナパルト』

問題は、このように対照的な2枚の絵のうち、どちらが実際の姿を映しているのかです。史実に近いのはドラロッシュの方です。険峻なアルプスを越えるのに背の高い馬は向いていないために、背が低くて安定性があり持久力にも優れたラバが用いられたのです。また、ダヴィッドの作品で左下の石には「ボナパルト」

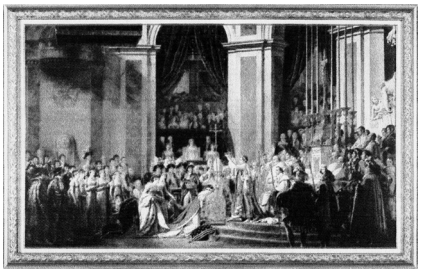
とともに「ハンニバル」、「シャルルマーニュ」の文字が見えますが、もちろん、そんな文字が実際に刻まれていたわけではありません。ナポレオンを過去の「アルプス越えの英雄」に重ね合わせるためにわざわざ描き込まれたものです。

おそらく、ドラロッシュの作品を知っている人は少ないでしょう。私たちのナポレオン像はダヴィッドの作品を一つの素材として形成されているに違いありません。しかし、ダヴィッドが描くナポレオン像が虚像だとすれば、私たちのナポレオン像は修正しなくてはなりません。そして、それと同時に、多くの人がこれまで、それが実像と考えてきたという事実についても問題にしなくてはならなくなるでしょう。

ともあれ、ナポレオンはダヴィッドの絵がたいそう気に入ったようで、1804年末にはダヴィッドを主席画家に登用しました。フランス革命からナポレオンの時代には、歴史的な出来事を描いた絵画と画家に大きな地位が与えられました。また一般に、歴史画あるいは記念画と呼ばれる作品は写真や映画がなかった時代の歴史的出来事の記録としてたいへん貴重なものです。

しかし、ここで問題が生じます。歴史画や記念画が果たして史実を忠実に再現したものかどうか疑問なしとしませんし、しばしば大きな困難を伴う史料批判が必要だからです。

とくに、ダヴィッドの作品は要注意です。たとえば、これも有名な『皇帝ナポレオン1世と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠式』(1805 − 07年)。この絵には、実際にはローマに居て戴冠式に列席していなかった母親のマリア＝レティツィア・ラモリノを画面中央の雛壇の真ん中に描くという嘘のほか、やや小柄だったナポレオンの上背を高く見せる巧妙な細工や、ナポレオンの注文で教皇ピウス7世の右手を戴冠祝聖のポーズに改めたりするなどの潤色が施され、それによって、ナポレオン崇拝が視覚化されているのです。



ダヴィッド『皇帝ナポレオン1世と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠式』

最近、歴史研究の史料として絵画や彫刻、壁画や落書きの絵などが重要視されるようになってきました。私も講義の配布資料や著書で多用しています。図像史料にはその時代の社会の様子が描かれていることがありますから、文字史料と同じくらいに価値があるからです。しかし、図像史料は不思議な威力がありますが、時代や社会をストレートに映し出しているとは限りません。嘘や潤色、あるいは作者の思想や、見る側の視線を意識した主張が意図的に描き込まれることもあります。ですから、絵に描かれていることをそのまま鵜呑みにしてはいけないのですが、どうしてそのような絵になったのかを分析すること、それはそれで、また、意味深いと言えるでしょう。

地に足をつけて歩みたい私

文学研究科 日本文化専攻 修士課程２年 **鈴木 真理子**

私は現在、大学院生として「北海道における産婆の歴史」を研究しています。しかしもう片方にはYOSAKOIソーラン祭りで踊る踊り手としての私がいます。私にとって第14回YOSAKOIソーラン祭りに、大賞受賞チームである「新琴似天舞龍神」のメンバーとして参加できたことは、大きな感動でした。昨年は教育実習のために、本祭に参加できませんでしたが、今年は大賞受賞の喜びを仲間とともに分かち合うことができました。私自身の自己表現の場がここにもあります。

９年前、地域のお祭りで「新琴似天舞龍神」の踊りをみて、入会したのが、YOSAKOIソーラン祭りへの参加のはじまりでした。それまで、仕事だけの毎日でしたが、運動や踊りなどしたことのない私が、本当にできるのか不安でした。しかし、今では年齢を超えた新しい友人が沢山できたことやYOSAKOIを通して地域の活動にも参加するようになりました。

今年はＶ２達成という大きな目標に向かって、昨年の自分たちを越えることを目指し、練習に励みました。練習では、何度も何度も繰り返し、自分の体を動かして、身をもって感じとり、体で覚えていくことが大切です。そのひとつひとつ積み重ねたものが、完成された踊りとなって、本祭で観客に観ていただけることが何よりも嬉しいことです。そこに観客からパワーをいただいて踊っている自分がいます。

私の家族・友人の応援はもちろんですが、本学部の先生方からも沢山の応援やお祝いのお言葉を頂きました。ありがとうございました。

中でも、Ｇ先生の奥様からのお祝いのメッセージには「踊りのスタート前にすくっと立ち上がり大声で、まりこー！かんばれー！と、祭り嫌いのＧ先生が叫ばれたこと」が、書かれてありました。普段のＧ先生からは、とても想像できませんので、感激大なるものがありました。

YOSAKOIソーラン祭りは一人の北大生が始めたことが、今では北海道の新しい文化といえるまで発展してきました。これからも大学院での勉強はもちろんのこと、「新琴似天舞龍神」のメンバーとして、地についた歩みをしていきたいと思います。

新任教員紹介

英米文化学科教授　**大塚 秀之**

群馬県の前橋に生まれ、そこで高校までを過ごし、東京で大学生活を送り、その後は、長らく神戸外大でアメリカ史・アメリカ社会の研究と教育に従事してきました大塚です。研究関心のうち、人種関係については、北海学園大学学報の第 61 号で簡単に述べましたので、以下では、もうひとつの研究関心である階級関係について述べてみたいと思います。アメリカンドリームという言葉がありますが、この言葉は、豊かな機会に恵まれたアメリカでは、努力をすれば誰もが成功できるという信念を示したものです。好景気で何事も順調に進行している時代には、この夢がくりかえされますが、不景気であったり不安定な時代になると、アメリカの夢に代わってクラスつまり階級が語られ始めます。今、アメリカを代表する新聞のひとつであるニューヨーク・タイムズ紙が、準備に 1 年以上もかけてきたという長い連載記事で、所得格差のかつてない拡大や学歴社会化を詳細にわたって報じ、この連載を〝クラスマタアズ〟つまり階級は重要であると論じていますが、報告されている事態、とくに詳細にわたるデータからは、アメリカ社会の著しい不均衡や分裂する姿がリアルに浮かび上がってきます。また、アメリカのもうひとつの代表紙であるウオールストリート・ジャーナル紙においても、アメリカ社会の階級的分裂が語られ始めました。豊かな社会であるがゆえに時には表面から姿を潜める階級や階級関係を見失なわず、この実態や関係を、もうひとつの重要な社会関係である人種関係と結合してアメリカの歴史や社会を観察する。これが、私のアメリカ研究の方法ということができます。

ところで、北海道には旅行や公立大学図書館長会議などの機会に何度か来ただけですから、雪の多さや特に風の強さに驚かされましたが、もうだいぶ慣れてきました。これからは、北海道のすばらしさを堪能しながら、研究と教育に全力を挙げたいと考えておりますので、どうかよろしくお願いいたします。

研修旅行　冬来たりなば春遠からじ

恒例となった日本文化学科の研修旅行。今年は参加学生 28 名、引率教員 4 名（船岡誠、菅泰雄、郡司淳、徳永良次）に添乗員の浦口さんの 33 名で実施しました。ここ、2 年ほど大雪や航空管制のトラブルなどで日程に大幅な変更があって心配だったのですが、大きな事故や病気などもなく、無事終了しました。現地のバス会社のガイドさんいわく「こんなまじめなお客さんは始めてですう～」と感心されることしきりでした。集合時間は守るし車内にゴミを残さないし、本学学生の「まじめ」気質の一端を見た思いがしました。

３月上旬は、こよみの上では春なのに、記録的な寒波がおりてきた時期と重なり、典型的な京都の「底冷え」が体験できました。今回は、花園大学で坐禅実習を体験させて頂いたのですが、暖房もない部屋の石畳の上を裸足で立ち、また足を組む。北海道も寒いのですが、別の意味の寒さが参加者を襲います。その後の、バスやホテルの暖房が何と有難かったことか！

さらに、元興寺文化財研究所では古文書の修復作業を見学できました。研究員の方には、年度末の忙しい時期に貴重な時間を割いて丁寧に説明してくださり、また質問にも快くお答え頂きました。「形あるものはいつかは滅びる」のが宿命とすれば、その宿命に人間の英知と努力を結集して抗う姿勢には感銘と尊敬の念を強くしました。

これらの体験は、普段北海道にいてはなかなかできないことで、とても貴重なものだったと思います。

今回の研修旅行が、参加したすべての人（参加していなくても、もちろん）にとっての厳しい冬を乗り越える糧になって頂ければ幸いです。

（引率教員：日本文化学科教授　徳永良次）

2 月 28 日	新千歳（8 時発　ANA772）→大阪空港→国立民族学博物館（昼食・自由見学）→京都・ホテル着（夕食は懇親会）
3 月 1 日	京都御所～冷泉家住宅～同志社大学（昼食）～花園大学（座禅体験・中尾教授による講演）～妙心寺
3 月 2 日	終日自主研修（京都市内、大阪、奈良、和歌山方面）
3 月 3 日	秋篠寺～平城宮跡・資料館～奈良国立博物館～元興寺（古文書修復見学）
3 月 4 日	終日自主研修
3 月 5 日	午前中自由行動　大阪空港（16 時発　ANA779）→新千歳　解散

「研修旅行の思い出」

知的好奇心を刺激した日本文化演習

2年J1組　雉子谷 麻美

今回の五泊六日の日本文化演習では色々なことを経験することができた。京都への旅行は今回が初めてだったわけではなく、一度高校の修学旅行で行ったことはあったが、これほど長い期間一カ所に留まっていたわけではなかったので、今回はじっくりと京都を見て回ることができたように思う。また、普通の観光旅行では行けないようなところへ行ったり、できないようなことを経験することができたのも日本文化演習だったからこそだろうと思っている。

団体研修でもっとも印象に残っているのは座禅体験である。これは普段気軽に体験できることではないので、緊張しつつも楽しみにしていた。実際やってみると、座り方の順序にも決まりがあり、声を出すことが禁じられているため、析と呼ばれる拍子木や、印磬と呼ばれる鐘を鳴らして合図をすることや、目を完全に閉じてはいけないことなど、やってみなければわからないようなことをたくさん知ることができた。途中足がつらくなったり、また無心になりきれていないことを感じたりもしたが、終わった時は気持ちが落ち付いてすっきりした感覚を味わえた。私には座禅をする静かな空間がなかなか心地よく感じられ、またいつか機会があればやってみたいと思った。

次に印象に残っているのは、妙心寺の法堂の天井に描かれた龍の図である。狩野探幽の筆だそうで、どの位置から見上げても龍がにらんでいるように見え、さらに見る方向を変えると天から下りてきているようにも、天に登っているようにも見える不思議な絵である。また、龍の左目は天井のほぼ中心に描かれているようだが、場所によっては中心にあるように見えたり、見えなかったりすることもおもしろい。さらに、この絵のすごさは技法だけでなくそのスケールの大きさだと思われる。法堂の天井に描かれているだけあってその迫力は半端ではない。そしてこの迫力はやはり実物を見なければわからないだろう。

また、今回の旅行では国立民族学博物館と奈良国立博物館という大きな博物館二館へも行くことができた。広すぎてあまりゆっくりと見ることができなかったのは残念だったが、私は特に国立民族学博物館がよかったと思う。世界の様々な地域ごとにパートを分けて、特色がわかるようになっていた。その中でも私が気に入ったのは世界中の民族衣装の展示を見られたことだ。写真や絵で見ることはあっても普段なかなか見ることができないものなのでついつい携帯のカメラで写真を撮ってしまった。実はこの博物館では常設展の展示品は写真を撮ってもいい

ということで、その点にも少し驚いた。観覧料も安く、これほど豊富な資料を見ることができるのなら、近くにあれば頻繁に通いたいほどである。

さて、自主研修で印象に残っているのはどこかというと、養源院と新撰組の壬生屯所遺蹟である。

養源院は血の痕が残っている血天井が有名で、伏見城落城の際に亡くなった多くの人を弔うため、そのときの血の痕がついた廊下の板の間を天井にしたという。建物自体それほど大きいわけではないが建物について、また中の絵画についての説明を聞くことができたので興味深く見ることができた。特に、鶯張りの廊下を歩いてみたり、天井に手の形でついた血の痕などをこの目で直接見ることができておもしろかった。

また、壬生屯所遺蹟では新撰組についての簡単な説明を聞くことができ、新撰組についての知識が乏しい私にはわかりやすかった。見学した後にはお抹茶と屯所餅というお菓子を食べて一服することもできた。

さらに、研修で印象に残ったのは形のあるものばかりではない。

やはり言葉づかいは標準語とはかなり違っていて、特にイントネーションは独特だと感じた。聞いているうちにうつってしまいそうにもなるが、真似しようとすると難しくてうまく真似できなかった。

また、制服を着た小学生の男の子が学帽をかぶっていたことに驚き、さらに半ズボンなのを見て、研修中に京都もけっこう寒いものだと思っていたが、やはりここは本州なのだとしみじみ思ってしまった。

ほかにも京都には本当に細い道が多く、車を運転するのは難しそうだった。そのためか、自転車が多いように感じた。また、街並や家もものが多く、密集していて、各々の家の前には防火バケツが置かれ水が張ってあるところが多かったのも印象的だった。

以上のように、今回の研修旅行で色々な京都を知ることができたように思う。もちろんまだまだ知らない部分も多いが、また京都に来てみたいという思いでこの研修旅行を終えた。

日本の文化を学び、異文化との交流を深める

2年J1組　吉田 蕗衣

今回の二日間の自主研修も含めた六日間の研修旅行で私は、観光客のよく訪れる場所から滅多に訪れることの出来ない場所まで見学することが出来た。団体では、国立民族学博物館に始まり、京都御所、同志社大学、花園大学、妙心寺、秋篠寺、平城宮跡・資料館、奈良国立博物館、元興寺・極楽坊収蔵庫という順序で三日間にわたり訪れた。自主研修では、平安神宮に始まり、八坂神社、伏見稲荷大社、養源院、神泉苑、本能寺、前川邸、八木邸、島原大門、壬生寺、池田屋事変跡地等を二日間にわたり訪れた。それらの各所・全体の感想を以下に述べたいと思う。

まず私は、日本の文化の遺物がどのように保存されているかについて知ることが出来た。遺物は掛け軸や巻物、首飾りから建築物まで、さまざまな形態がある。元興寺・極楽坊収蔵庫の財団法人元興寺文化財研究所では、これら寺の遺物の整理や資料の調査を行い、昔から現在まで至る日本の文化を解読し、復元している。また、保存科学部門では、全国各地の遺物を科学的保存処理している。平城宮跡・資料館でも、実際に復元されている工程や復元された朱雀門があり、これから復元予定の第一次大極殿についても詳しく教えてもらうことが出来た。奈良の秋篠寺では戦争や大火の中、必死で仏像だけ

でも残そうとした当時の人々の思いや、それを守っていこうとする人々の思いがうかがえた。その後、仏像も一宗教の人々のものとしてだけではなく、全世界に日本の歴史を伝える役目を果たした。自主研修の方は団体研修よりも時代が若い箇所が多かったが、伏見稲荷大社では朽ちてしまった鳥居の根元に札を立て、何時その鳥居が撤去されたのかを分かるようにしてあった。八木邸では、芹沢鴨が惨殺されたときに鴨居についた刀傷が残されていた。当時の血気盛んな新撰組に合わせて低く作られた天井等も直に見ることが出来た。つまり私たちが訪れた場所では、ずっと以前から解読、復元、保存という工程が行われ、その保存された形が現在多くの人々の間で親しまれているといえる。更に、それらが日本を含め世界に日本の文化の有様を伝えているといえる。

次に日本の文化は、宗教から非常に多く影響を受けているということを知ることが出来た。特に同志社大学や花園大学ではそれが顕著であった。同志社大学はキリスト教との関係が深いし、花園大学は禅宗との関係が深い。花園大学での講演や座禅体験は、普段ふれることの少ない宗教の一部でも実体験から知ることの出来る有意義なものであった。

そして最後に、異文化にも少しふれることができた。これは特に国立民族学博物館でいえることだが、他の各所でも、そこを訪れた外国人がどのようなものに興味を示すかなどを知ることが出来た。国立民族学博物館では写真撮影が可能だったこともあり、世界の沢山の文化の一部を記録として残した。日本と所縁のない国の文化でも何となく似ている所があったり、日本が影響を受けている文化なのに全く似ていない部分がある所も、面白いと思う。

以上のように私は、京都・奈良・大阪への研修旅行で、遺物やそれから分かる当時の社会を、解読、復元、保存という工程から垣間見ることが出来た。これは普段意識していない工程を改めて認識すると共に、現在までの歴史の過程を、保存された形から知ることに繋がった。現在私たちが目にしている遺物は必ずしも当時のままの形で残されているわけではないが、可能な限りそのままの形で後世に残していきたい。そして日本の文化を学び、異文化との交流も更に深めたいと思った。

ゼミ室紹介

2部 日本文化学科　小野寺ゼミナール

小野寺 静子　万葉集中の越中守時代の大伴家持の歌を中心によんでいる。発表者は万葉集の注釈書等により、歌を正しく解釈した上で参加者に問題を投げかけ意見を交わす、という方式で行っている。1部も2部もほぼ同じことを行っているが、今回は2部のゼミの皆さんに登場いただいた。

万葉集の編纂の過程は複雑であるが、大伴家持が大きく関わっている。家持は防人歌の採録にあたり「拙劣の歌は取り載せず」と、拙劣なものは載せないことを明記している。また、恋の相手としては認めなかったらしいが、自分に贈ってきた笠女郎の歌を29首も載せていることから、万葉集に歌を採録するにあたっては、私情よりもその歌が載せるに値するかという立場を貫いたといえる。万葉集の歌は、家持が合格とみなした歌なのである。

家持の歌は、人間関係、女性関係、大伴一族の長としての立場、といったことからよまれがちであるが、家持の歌を含めて万葉集の歌が、家持の和歌観によるものだということを考えてゆくこともゼミの課題である。

坂元 久美子（3年）　私は3年でゼミの雰囲気にやっと慣れてきたところです。家持についてあまりよく知りませんでしたが、先輩方の発表により、家持の性格、人間関係、恋愛に対する考え方などが見えてきました。まだわからない事が多いのですが、小野寺先生や先輩方の指導のもと、萬葉集についてもっと知識を深めたいと思います。

中野 寛美（3年）　火曜日のゼミの時間は、一週間で最も待ち遠しい時間だ。万葉集における大伴家持の歌を訳しながら、それに伴う彼の心情をたどる作業が主体で、古典好きの私にはたまらない90分間なのである。卒業研究は歌集作りに取り組みたいと考えているので、よい作品を作れるように、ゼミ全体からたくさんの事を吸収していきたい。

山口　和（3年）　小野寺ゼミでは萬葉集の中でも大伴家持とそれを巡る人物の歌についての課題を毎回1人がレポートしてその内容を皆で議論しています。

発表を聞いている間に、歌についての見解がそれぞれ異なることが見えてきます。その後に既成の研究文献と比較することで現代人と古代人では考え方が違うことが解り、そこから萬葉集の時代の人の有り方や歌がどの様な存在だったのかを解くことができます。

今野 景子（4年）　大伴家持は万葉集の編纂者で相聞や挽歌などの様々な歌を残しています。私が家持の歌を学ぶ上で注目したいのは、奈良時代の政治と家持の関わりです。『続日本紀』などの歴史書などからは見えにくい家持の心情が『万葉集』をよく読むことで見えてくると思います。そこから家持を理解するのが歌を見るおもしろさだと思います。

本多 里美（4年）　万葉集の中でもっとも興味のあるのは、恋愛に関する歌です。現在とは婚姻形態や常識が異なる中で、相手を想う気持ちや嫉妬心は変わらない。そのことにひかれました。

卒業論文では万葉集の編纂者である大伴家持と坂上大嬢がどのような過程をへて結婚にいたったのか、などを贈答歌をみて考えたいです。

丹羽 猛浩（4年）　このゼミでは、三年生3人、四年生4人と、若干少ない人数ではありますが、みんな仲がよく、いつも熱心な姿勢でゼミにのぞんでいるので、毎回活気にあふれています。ゼミの内容は日本最古の歌集中の、主に大伴家持の歌を中心に研究しています。それをゼミ生が様々な考えをもって発表し討論しています。

柳沼 隆太（4年）　万葉集における代表的歌人であり、その編纂者のひとりでもあったとされる大伴家持であるが、その歌は非常に奥が深い。家持の日々の生活は常に歌とともにあったように感じられる。だからこそ作り得たのではないかと思わせるような深みのある歌が数多く残されている。一首一首に隠された思いを読み解くのが面白い。

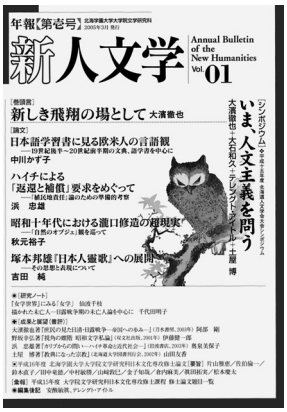
大学院の窓

二年周期の「進化」と『年報 新人文学』の誕生

日本文化学科教授　**テレングト・アイトル**

本学大学院文学研究科開設以来、その歩んだ道を振り返ってみると、ちょうど二年毎に大きく変化してきたのではないかと思います。つまり、1999年4月日本文化専攻修士課程の開設を皮切りに、二年後、2001年3月『日本文化研究』の創刊、同年4月日本文化専攻博士課程の開設、さらにその二年後、2003年4月英米文化専攻修士課程が開設され、またその二年後、2005年3月『年報　新人文学』が創刊され、同年4月英米文化専攻博士課程が開設されたのです。この二年毎の変化に伴い、「陣痛」もあったのですが、確実に成長・進化もしてきたといえましょうか。とりわけ最近、「知」の社会的な地盤沈下が大がかりに進行しているといわれているなか、本研究科は、敢えて「新人文主義」を掲げ、自己の知的環境を整えるため「旧来の『日本文化研究』を発展的に解消し」て、新たに『年報　新人文学』をもって再出発することにしました。

「北の大地から二十世紀の呪縛を超克しうる新たなる学問を発信せんとの宿志がこめられています」と、大濱徹也研究科長による『年報　新人文学』の巻頭言には、当研究科の意気込みと発刊主旨が示されています。しかし、「人文主義が墜ちこんだ隘路を凝視し、人間が人間であるとは何かを問い質さんとする」この「新人文主義」の「営みは、人間が無限なる知への讃歌にいまだ酔い痴れている現況をみるにつけ、かぎりなく過酷にして、むなしき業かもしれません」とも巻頭言に書かれており、いみじくも、そこに『年報　新人文学』の今後の道のりの困難さが暗示されているといえます。



実際、今回発刊した『年報　新人文学』は、大学紀要の形式を踏まえ（A5判、300頁以内）、年一回発行となります。主として「論文」、「研究ノート（資料・報告など）」、「成果と展望（書評など）」、「学術イベント（シンポジウムなど）」、「修士・博士課程論文要旨」、「彙報（修士・博士論文題目）」などの項目・コラムによって構成されますが、その最大の特徴は、一種のレフェリー制度を導入した点にあり、個々の論の欠点を是正し、いずれの論文においても学問的に一定の水準を確保しようとする努力にあります。

しかも、表紙のデザインにつきまして、時空を超えた巡り合せの運命的な符合といえましょうか、偶然にも北海道で崇拝されてきた守護神「ふくろう」が、ギリシャ・ローマ神話における知恵や学問を象徴する鳥でもあったので、北海道から発する本研究科の『年報　新人文学』は、今回「ふくろう」をシンボルと決めました。発刊号に続く今後のすべての号において、「ふくろう」は恐らく本誌の発刊主旨とレフェリー制度と共に踏襲されるだろうと思いますが、今まで二年毎に「進化」してきた当研究科の歩みとともに、今後『年報　新人文学』も守護神と知恵の鳥の導きによって、さらなる成長・進化をなしとげていくことを期待したいものです。

■学会・研究発表

土屋　博 “The Study of Christianity within the Field of Religious Studies in Japan”,The 19th World Congress of the International Association for the History of Religions (Organized Panel), Tokyo, 25 March, 2005.

栗原　豪彦 「英語学と言語学―あらためてアメリカ構造言語学を考える」2004年10月3日、日本英文学会北海道支部大会シンポジウム、北海道大学

■著作・論文など

濱(浜)　忠雄 「ハイチによる『返還と補償』要求をめぐって―『植民地責任』論のための準備的考察―」3月、『年報　新人文学』(北海学園大学大学院文学研究科）第壱号

徳永　良次 「高山寺初期における聖教の保管と整理　―古目録を手掛かりとして―」3月、訓点語学会編「訓点語と訓点資料」第114輯

岩崎まさみ 「開発事業にともない社会影響評価の手法とその事例」、科学研究費報告書『生活世界とりわけ土地との関係をめぐる伝統的法体系と外来法体系の葛藤―共生の可能性と限界の研究―』、pp. 1 − 26 ◇「アイヌの生態環境知識の再構築」、『言語文化研究』16巻3号、pp.13 − 18 ◇ Resource Management for the Next Generation: Co-management of Fishery Resources in the Western Canadian Arctic Region ◇ Indigenous Use and Management of Marine Resources Senri Ethnological Studies No.67 ed by N.Kishigami and J.M.Savelle ◇「イヌビアルイト ーホッキョクセミクジラを捕獲」(共著)、『講座　世界の先住民族第7巻北米』、綾部恒雄他編、明石書店、pp.232 − 246

安酸　敏眞 「セバスティアン・フランクにおける終末論と神秘主義」3月、『人文論集』第30号(北海学園大学)

土屋　博 「神学からキリスト教学へ―日本におけるキリスト教研究の根本的課題―」日本宗教学会『宗教研究』343号、2005年3月

小野寺靜子 「春の出挙の歌　―巻十七・四〇二一〜四〇二九―（上)」3月、『古代文学論集―村山出先生御退休記念―』◇「春の出挙の歌　―巻十七・四〇二一〜四〇二九―（下)」3月、『人文論集』 30号

船岡　誠 「紫衣勅許事件」日本の名僧15『天海・崇伝』2004年7月、吉川弘文館◇「道元の入宋」『国文学　解釈と鑑賞』(特集　聖地と巡礼) 2005年5月号◇「無底良韶と正法寺の開創」平成13年度〜平成16年度科学研究費補助金〔基盤研究（A)(1)〕研究成果報告書（二)『東北仏教の社会的機能と複合的性格に関する調査研究』、2005年6月

大石　和久 「北海道と映画―北海道の表象とそのアイデンティティ―」3月、『開発論集』(北海学園大学開発研究所)

大濱　徹也 『講談日本通史』2月25日、四六版、326頁、同成社◇「貌としてのアーカイブズが問いかけること」3月30日、『アーカイブズ』第19号、1 − 20頁、独立行政法人国立公文書館◇「貌としてのアーカイブズ」3月31日、『広島大学文書館紀要』第7号、14 − 28頁、広島大学文書館

テレングト・アイトル 「怨親平等と戦争とモンゴル―元兵怨霊追善供養碑をめぐって―」『東北仏教の世界―社会的機能と複合的性格―』有峰書店新社、3月◇「怨親平等と戦争とモンゴル―元兵怨霊追善供養碑をめぐって―」『東北仏教の社会的機能と複合的性格に関する調査研究』(研究代表者：大濱徹也、平成13年度〜16年度科学研究費補助金（基盤研究Ａ）研究成果報告書〈Ⅱ〉課題番号13301002) 6月

中川かず子 「日本語学習書に見る欧米人の言語観― 19世紀後半〜20世紀前半期の文典、語学書を中心に」、3月、北海学園大学大学院文学研究科『年報　新人文学』第一号

■講演

宝利　尚一 「遠くて遠い？イスラーム―メディアの視点から―」5月29日、第3回北海道宗教情報フォーラム、北海道大学学術交流会館小講堂

栗原　豪彦 「「民族の言葉」の種々相とその表記」5月28日、北海道ローマ字研究会記念講演、札幌テレビ塔会議室◇「言語学における二分法・

二元論的概念（dualism/dichotomies）をめぐって」6 月 23 日、第 50 回認知機能言語学談話会、北海道大学

大石　和久　「北海道と映画」6 月 11 日、北海道芸術学会アートトーク vol. 9 、キノカフェ

大濵　徹也　特別講演「宗教アーカイブの責務と課題」6 月 4 日、日本近代仏教史研究会研究大会◇「三谷民子とその時代」5 月 28 日、女子学院同窓会主催「三谷民子没後 60 年記念講演会」

テレングト・アイトル　「『境界』を生きる新人文主義」『年報　新人文学』創刊号、北海学園大学大学院文学研究科、3 月

中川かず子　「イギリスの日本語教育について―歴史と現状」、3 月、ボランティア日本語ネットワーク、札幌Ｌ－プラザ

■評論・エッセイなど

岩崎まさみ　「先住民が参加する研究のあり方について」、『平成 16 年度普及啓発セミナー報告集』pp.31 － 35

安酸　敏眞　『安酸家の原風景』（共編著）2 月、アイワード◇「マイセン磁器とレッシング」3 月、『人文フォーラム』第 22 号

須田　一弘　「クワズイモを食う―トンガのジャイアントタロ」5 月、『エコソフィア』15 号、昭和堂

宝利　尚一　特別講座新聞比較論「人質報道、メディア様変わり」月刊ウィング Sapporo2005 年 1 月号◇「派遣延長、異色の毎日社説」同 2 月号◇「メディアが描く明日の日本」同 3 月号◇「朝日はなぜ答えないのか？」同 4 月号◇「産経が朝日に噛み付いた」同 5 月号◇「朝日と産経がまた言い争った」同 6 月号

土屋　　博　平藤喜久子著『神話学と日本の神々』（書評）、日本宗教学会『宗教研究』342 号、2004 年 12 月

船岡　　誠　「沢庵の禅の世界」、『駒澤大學佛教學部論集』35 号、2004 年 10 月

中川かず子　“Letter from Japan”、2 月、Newsletter of the JRC、ロンドン大学東洋アフリカ研究所 Japan Research Centre ／◇「ロンドン便り」、3 月、『人文フォーラム』22 号、北海学園大学人文学部

■その他

安酸　敏眞　『安酸映一追悼集』（共編）2 月、アイワード◇「編集後記」3 月、『年報　新人文学』第 1 号（北海学園大学大学院文学研究科）◇『セバスティアン・フランクにおける終末論と神秘主義―プロテスタント的スピリチュアリスムスの思想構造の分析―』（平成 15 年度－平成 16 年度科学研究費補助金研究成果報告書）6 月

土屋　　博　事典：「キリスト教」・「イエス・キリスト」・「教典」・「聖典」・「天国」・「地獄」の項目、『現代宗教事典』弘文堂、2005 年 1 月

大石　和久　「映画と新しいヒューマニズム」（平成 15 年度北海道人学会大会シンポジウムにおける発表）3 月、『年報　新人文学』（北海学園大学大学院文学研究科）第 1 号

宝利　尚一　第 28 回　地中海学会大会（6 月 26 日－ 27 日、北海学園大学）準備委員長として大会を準備。6 月 26 日地中海トーキング「温泉・テルメ・ハンマーム、いやしの空間」の司会を務める。

大濵　徹也　パネルディスカッション「現代社会に公文書館は必要か？」閉会挨拶 46 － 48 頁、◇「公文書館専門職員養成課程　評価・選別論」総合討議、閉講挨拶　85 頁◇『アーカイブズ』18 号、3 月 3 日、独立行政法人国立公文書館◇「新しき飛翔の場として」（巻頭言）2 － 3 頁◇「何故「いま、新人文主義を問う」か―開会の挨拶にかえて―」160-161 頁◇『年報　新人文学』第 1 号、3 月 31 日、北海学園大学大学院文学研究科◇「来賓あいさつ」『会報』No72、3 月 31 日、6 － 8 頁、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会

中川かず子　「ソトから見た日本語―日本人の発想と日本語」（出前講義）、6 月、函館東高校

■学位取得

Patrick O'Brien　Honolulu Ph.D. May 2004. Title “IMAGERY AND SYMBOL OF THE AIRPLANE IN AMERICAN FILM 1950-2004”

〈日本文化学科〉

・指導教員　菅　泰雄

◎岡　崎　安　紀「時代を超えるものまね」
梶　　麻　美「ひらがなのインパクト」
草　浦　沙　織「学校教育における敬語指導」
齊　藤　真梨子「擬音語・擬態語の重要性」
佐々木　雅　夫「生涯学習における学びのシステムの変革に関する考察」
渋　谷　好　重「「……（さ）せていただく」について」
田　中　絵　理「現代日本語におけるカタカナ表記の効用」
千　葉　麻梨子「日常会話におけるあいづちの表現の考察」
吉　田　　泰「文末における接続助詞の終助詞的用法について」
☆梁　川　明　子「流行歌に見る男性像の変遷」

・指導教員　中川かず子

◎奥　野　恵利奈「現代敬語に見られる誤用について」
小見山　紫　野「言文一致運動と近代文学者」
斎　藤　直　美「異文化接触のもたらす効果」
齊　藤　寛　子「国語教育と現代日本語の関わり」
神　馬　奈々子「女性の社会的役割とことば」
鈴　鹿　秀　樹「丁寧な表現とコミュニケーション」
長　澤　安　奈「学習者自身を知る」
南　川　妙　子「地域に根ざした学校図書館の可能性」
宮　内　亜紀子「現代女性と敬意表現」
森　岡　大　法「コミュニケーションと敬意表現」
山　口　遥　子「現代人の敬語について」
☆鎌　田　マ　リ「20 世紀新語・流行語年表」
吉　田　一　樹「釧路地域の方言の言語的特徴」
坂　下　久美子「中国語のテンス・アスペクトについて」
加　藤　真　紀「台湾における日本語教育と現地の人々の受け止め方」

・指導教員　大石和久

◎秋　田　拓　朗「ヒッチコック映画を分析する」
伊　藤　健　司「「怖い」映画について」
亀　井　　聡「寅さんが日本人に残したもの」
北　川　大　我「フェリーニの正直な嘘の映像」
坂　本　麻衣子「性同一性障害をテーマにした映画から見られる性同一性障害のイメージとその映画が社会にもたらした影響についての考察」
佐々木　浩　二「チャップリン映画の魅力と秘密」
佐　藤　絵美子「異質な映画監督北野武と映画に対しての意識の移り変わり」
鈴　木　　透「「木更津キャッツアイ」映画化の軌跡とその魅力」
高　橋　太　一「『ラストサムライ』に見る武士道精神」
西　村　香穂理「千と千尋の神隠し」
長谷川　吉　人「ミュージック・ビデオにおける実験的映像表現と映画との関係」
福　永　勇　気「エンディングのパターンから映画の楽しみ方を考える」
山　口　千　草「指輪物語とロード・オブ・ザリング」
坂　本　尚　基「黒人映画作家スパイク・リーについての考察」
杉　山　力　哉「映画監督《黒沢清》について」
☆荒　谷　紀　彦「針と糸と布」（ビデオ作品）
井　川　重　乃「映画「ツィゴイゼルワイゼン」に見る世界」
吉　川　千　晶「刑事映画追求」
堤　野　友　貴「映画タイトル原題邦題比較論」
堀　　ちあき「ジブリ映画における一考察」

・指導教員　須田一弘

◎穴　井　修　平「ジョークの構造分析」
有　馬　美沙子「ダイエット」
石　原　　瞳「飲酒の文化」
氏　家　由里子「ブラジャーの文化人類学的研究」
太　田　弥　生「成人式を考える」
神　山　亜　希「化粧による心理効果」
立　﨑　知　恵「囲碁の精神世界」
船　越　　誠「テレビゲーム文化の『これまで』」
三　富　哲　生「富野由悠季考察」
武　蔵　加衣子「刺身」
山　本　侑　香「香水」
矢　元　亜　実「現代の百人一首カルタ」
村　山　雅　美「変わりゆく葬儀」
☆稲　村　久美子「現在姥捨て考」
笹　木　　智「『現代社会』の鬼子達」

・指導教員　大濵徹也

◎朝　倉　直　美「狸小路の盛衰」
東　井　　彩「ふるさと毛陽」
稲　川　慎　也「「食」の変化と不変」
及　川　佑　介「地主としてのトルストイ」
金　田　　篤「熊牛に生きて」
栗　本　瑞　恵「女と刀」
佐　藤　和　也「継承する者　黒澤酉蔵」
佐　野　貴　望「西郷伝の歴史的変遷」
土　屋　嘉　美「戦時下教育改革の変容と修身教育」
出　岡　唯　子「妖怪考」
増　田　千　鶴「さくらももこの作品に見る人間関係」
加　藤　はるか「留岡幸助が見た青少年」
☆居弥口　宏　美「自分史」
宇　部　奈緒美「灯りの変遷・暮らしの変化」
川　岸　未央子「私の発見～新たなる旅立ちのために～」
小　林　慧　子「ハンセン病者の証」
白　岩　智世奈「西洋洗濯と札幌―草分け堤敬治郎を通して見る札幌区―」
蓼　原　恵　理「江戸随筆にみる「犬」像」
七　海　千　秋「原野に生きた女―新天地をもとめて―」
吉　田　　聖「百鬼夜行図考」

・指導教員　大谷通順

◎田　中　大　介「日本における麻雀と小説・漫画の関係についての考察」

・指導教員　テレングト・アイトル

◎大　井　香　織「磨かれた〈美〉」
菊　地　笑美子「ジャンルを越えた移動者」
田　﨑　洋　平「家族と生きていくという旅」
小　松　丈　洋「言葉の杖」
鈴　木　章　玄「司馬遼太郎『峠』における武士道の美の考察」
林　　聡　子「小説『地獄変』と映画『地獄変』の世界」
持　田　佳　紀「三島由紀夫『潮騒』とその映画」

・指導教員　小野寺靜子

◎伊　原　智　美「枕詞「ぬばたまの」についての考察」
金　澤　幸　太「大伴家持と大伴池主の交友」
久　保　友峰恵「万葉集にみる夢」
鈴　木　絵　実「大伴家持のホトトギス詠」
相　馬　那　緒「雪と梅の見立ての歌」
茶　円　　綾「吉野讃歌考」
坪　井　麻　有「大津皇子関連歌の仮託について」
永　田　美　幸「防人の心情と編纂の目的」
本　間　　恵「山上憶良」
竹　内　智　大「大伴坂上郎女」
☆近　藤　ときえ「歌集「こころ」」
佐　藤　歌　子「短歌集「想い」」
吉　川　喜美子「創作（短歌）」

・指導教員　野坂幸弘

◎池　浦　　睦「遠藤周作『海と毒薬』論」
伊　藤　未　央「村上春樹文学の主人公と他者との距離感」
高　橋　　創「池波正太郎の文学」
只　野　有　佳「『こころ』の受容」
土　屋　志穂子「宮沢賢治『銀河鉄道の夜』について」
中　島　敬　介「中島敦と二つの物語」
福　岡　　敦「文学を読むことの意味とは「夢十夜」の解釈をめぐって」
竹　下　洋　希「太宰治『人間失格』論」
☆勝　木　直　子「遠藤周作論『深い河』が語るもの」
今　野　千　恵「ALICE IN MY DREAM（絵本）」
種　市　　祐「志賀直哉論」
津久井　秀　行「転機」
山　田　美　香「四季情景詩集」
松　川　優　一「草野心平の二つの詩が心情に与えるもの」
森　　あゆみ「中原中也の『山羊の歌』」
柳　橋　孝　治「小説　『罪』『神様の言葉』『死が二人を別つまで』『ジプシー』」

・指導教員　徳永良次

◎池　端　　陵「音楽の力」
田　中　香　織「CHAGE&ASKA の文体を探る」
鋪　　礼　子「語彙から見る函館方言の地域性」
☆長谷山　由　佳「BUMP OF CHICKEN　詩に託された想い」
濱　田　達　矢「ASIAN　KUNG-FU GENERATION」
上　田　有　香「話しことばと書き言葉」

・指導教員　追塩千尋

◎伊　藤　有　希「古代日本における色の機能とその力」
潮　田　あ　や「今昔物語に見られる地蔵信仰の特色」
栗　山　恵美子「鬼と鉄」
材　木　良　市「女性権力者から見た古代史」
高　橋　智　子「古代人と月」
高　橋　聡　子「万葉歌人　額田王」
芳　賀　絵梨子「『本朝神仙伝』にみられる仙人像」
畠　田　慎　也「古代日本人の天体観」
山　根　智　子「斎王・嬬子女王」
梅　田　直　子「藤原彰子と摂関政治」
岡　本　　学「古代蝦夷」
☆澤　田　　梓「日本人の桜観」
高　橋　優　子「『今昔物語集』巻二十四の芸能について」
長　野　浩　子「平安時代の女性の地位」

・指導教員　船岡　誠

◎石　塚　大　悟「史料に見る近世庶民の日常の娯楽と文化」
稲　垣　森　太「前田慶次研究」
井　上　かほる「日本の城　築城の表と裏」
上　野　芙由美「頼朝と義経」
女　澤　智　子「蓮如の女性観について」
北　山　智　理「「追腹」から見る『葉隠』」
斉　藤　瑶　子「信長権力の象徴「安土城」について」
澤　田　宏　美「蝦夷共和国建国を目指した男」
塩　田　隆　志「鎖国論の考察」
添　田　　桂「庶民の葬式について　始まりと今」
高　橋　聡　志「日本古来の『舞』及び『能』から考察する『狂気』」
中　島　奈　美「傀儡子の正体」
花　輪　陽　平「アイヌの人たちが認識している死に関する一考察」
藤　井　郁　江「人間良寛とその文学にふれて」
藤　江　美　帆「義経追討の理由」
藤　澤　友　子「塙保己一」
谷　津　克　郎「近世における寺院・僧侶の実態について」
山　本　泰　史「宮本武蔵の生涯と五輪書に見る思想」
吉　田　麻衣子「鎌倉時代の犯罪検断についての考察」
若　木　　力「御成敗式目について」
☆大　橋　　巧「陰陽道と鬼」
大　堀　晋　也「荻生徂徠と「民」」
斉　藤　　司「関ヶ原合戦論」
山　内　　康「武田勝頼研究」

〈英米文化学科〉

・指導教員　井上真蔵

小　坂　公　人「三浦知良」
近　藤　奈央子「ホーレス・ケブロン」
佐　藤　彩　子「異文化としてのマクドナルド」
芝　　直　子「スターバックス日本上陸」
中　村　麻衣子「盲導犬に対する社会の反応」
宮　崎　久　美「カルロス・ゴーンと日産」
渡　邊　　梢「アメリカと日本の比較」
藤　原　志　保「ホームステイからの影響」
山　本　愛　子「外国人客への対応」
太　田　元　紀「階級社会の中での言葉の使い分け」
岡　田　麻　知「肉体年齢 100 歳の天使」
杉　山　禮　子「カナダに渡った三尾村」

・指導教員　岩崎まさみ

五十嵐　弘　樹「伝統的焼畑と熱帯雨林の減少の関わり」
泉　　賢　次「観光産業の変遷とエコツーリズム」
泉　　沙　希「戦後学生運動について」
清　永　麻衣子「ゲイが差別を受ける要因と彼らの現状とこれから」
佐　藤　莉　恵「フランソワーズ・サガンの小説に見るフランス」
鈴　木　絵　美「日本人と犬」
竹　部　弘　明「衣服の起源」
谷　　寿　彰「北海道の地神碑」
福　田　美　穂「ガウディの建築にみるカタルーニャ」
輪　嶋　梨　佳「アメリカ社会を反映する映画の追求」
一　宮　章　郎「開発人類学の開発に対する貢献の可能性について」
大　橋　里　花「現代のカフェ文化」
鈴　木　詠　子「「書く」という行為　人間と現代文化への結びつきについて」
牧　下　美紗子「日本の風呂文化についての文化人類学的考察」
山　崎　留理子「いじめに見る人の差別」

・指導教員　川上武志

大　内　有　美「ジキル博士とハイド氏」
岡　林　美　希「Oscar Wilde 研究　小説 The Picture Of Dorian Gray に見られるワイルド」
登　藤　弘　康「Samuel Taylor Coleridge」
西　尾　昌　高「エミリー・ディキンスンの研究と詩の分析」
野　崎　秀　人「ウィリアム・ブレイク」
長谷川　由　佳「ルイス・キャロル」
久　木　　綾「ジェイン・エア」
藤　田　大　祐「自然詩人としてのワーズワース」
山　川　佳　子「JOHN KEATS」
山　田　知　佳「不思議の国のことば遊び」

・指導教員　栗原豪彦

荒　川　佳奈美「会話の構造」
掛　橋　元　気「笑いと語用論的コミュニケーション」
金　澤　奈　緒「会話にみられるズレ」
小　玉　真　希「広告キャッチフレーズ・台詞などにおける語用論的解釈」
富　樫　晴　美「『笑い』の語用論」
七　崎　　玄「笑いの語用論的分析」
林　　大　介「日常生活に見られる会話的推意の分析」
三　塚　圭　佑「語用論的視点から見た映画」
吉　田　圭　佑「日常会話における語用論的分析」
田　中　秀　治「関連性理論によるユーモアの分析」

・指導教員　桑原俊一

一　戸　寿　志「天使と悪魔」
及　川　麻　衣「ＤＶ」
岡　本　加奈子「現代社会における家庭問題」
鬼　塚　雅　人「ギリシア神話」
境　　友香里「現代の結婚」
笹　岡　ゆかり「神のメッセンジャー・天使」
佐　藤　理恵子「結婚の歴史」
広　瀬　哲　哉「天地創造論」
藤　原　由　梨「ヨーロッパにおける魔女」
石　川　龍　一「ラビのユダヤ教」
畠　山　奈津子「クリスマスにまつわるものの由来」
松　浦　清　香「ミケランジェロ」

・指導教員　竹内　潔

天　沼　里　紗「遺伝子と遺伝病」
板　川　瑠　美「環境ホルモンについて」
一　関　泰　子「尊厳死・安楽死について」
伊　原　真紀子「遺伝子組み換え食品について」
大　塚　麻　里「脳死」
小　川　奈緒子「アレルギーについて」
近　藤　真由美「人工中絶に関する考察」
大　門　　学「SARS（重症急性呼吸器症候群）について」
田　中　　環「人間にとって原子力発電とは何か」
辻　　寿　美「クローン技術」
水　口　能　孝「「遺伝子組換え食品」について」

・指導教員　土屋　博

畠　山　　拓「ユングによる宗教分析」
吉　田　勇　介「週刊誌報道に見る創価学会」
加　藤　美　奈「ゴータマ・シッダッタの死」
竹　内　康　晃「太平天国」
八　島　千　尋「朝鮮のキリスト教」
小　鷹　　恵「ユダヤ人と迫害」
津　谷　　渚「キリスト教におけるマリア崇敬」
坂　下　千　里「日本における新宗教」
小　瀧　　藍「歴史を動かす宗教」
大　塚　絵　梨「アメリカの宗教と政治」
清　水　文　香「ヒンドゥー教とドラッグ」
宮　越　祥　絵「医学と宗教」

・指導教員　常見信代

江　村　樹　里「〈子ども〉の誕生とイギリス児童文学」
柿　原　留美子「ウィリアム・モリスとジェンティリティ」
勝　尾　智　絵「新しい女の誕生」

佐藤明美「ヴィクトリア女王の象徴性」
千葉仙子「ヴィクトリア時代を生き抜いた芸術家」
林美穂「パブリック・スクールと近代スポーツ」
平本典子「シャーロット・ブロンテとガヴァネス」
松橋香「芸術と文学から見るアーサー王リヴァイヴァル」
山崎芳秀「「公式帝国」と「非公式帝国」」
佐藤歩「ヘンリ 2 世の司法改革」
先名武士「12 世紀におけるアングロ・ノルマン人のアイルランド侵入」

・指導教員　濱　忠雄

勝田雅史「アメリカ南北戦争」
金澤秀和「アメリカの現在・過去・未来」
佐々木麻衣「アメリカの黒人問題」
野田恵子「アメリカとテロリズム」
前田有香「大西洋奴隷貿易がもたらした負の遺産」
大和美裕希「黒人音楽」
渡邉美緒「世界の中核国となったイギリス」
斎木智里「アメリカにおけるマルチカルチュラリズム」
花田恭子「独立後のアメリカ経済の発展」
青木丈朗「アフリカ諸国の貿易と歴史について」
石毛龍姿「EU とユーロからヨーロッパを考える」
大友琢矢「イギリス産業革命と世界市場の形成」
樋口裕之「フランス植民地政策について」

・指導教員　宝利尚一

石井恵「サッカー・ビジネス」
竹越麻美「スポーツ放送権ビジネス」
千葉美鈴「アニマル・セラピー」
中村まこ美「日米野球は活性化するか」
鳴海玄希「ヨーロッパの移民と宗教」
原夕布子「兄弟の神話」
引谷俊彦「ニュースキャスターのあるべき姿」
古川英里「英 BBCvs 英政府の対立とその背景」
真壁亜弓「オタク文化が世界を魅了する」
南谷さやか「フランスにおける少数言語の衰退と擁護」

・指導教員　安武秀岳

松田直美「アメリカ映画史における人種的差別」
三戸部正典「アメリカが負けた戦争」
菅昌弘「黒人奴隷解放運動」
曽川祐弥「民主党急進派「ロコフォコ」」
畑超「米国移民政策」
山下徹「シヴィリアン・コントロール」
伊藤美恵「『アメリカの社会運動～ CIO 史の研究』について」
角田綾「アメリカの黒人奴隷制」
曽根博憲「南北戦争」
村田勇気「ベトナム戦争」

・指導教員　米坂スザンヌ

片山ゆかり“Singapore English”
荒金幸枝“Interpretation”
大友宏記“The History of the English Dictionary”
岡部慎也“Jokes: A Pragmatic Analysis”
杉村祐基“The History of American English and its Difference from British English”
高根京子“Teaching Japanese as a Foreign Language: A History”
土田誠子“Semantics ～ Considerations on the meaning of words ～”
山科典子“Language in Advertising: Pragmatics and American Advertisements”
大友奈奈子“Teaching English to Japanese Elementary School Children”
東山泰子“The Economic Value of Foreign Languages in Japan”
大長歩“Terms of Address”
木村直美“Listening Comprehension”

編集後記

人文学部の新カリキュラムがスタートした今年度、二年ぶりに編集委員に復帰いたしました。『人文フォーラム』は人文学部のみなさんのご協力の上に成り立っているのだなと、改めて実感いたしました。執筆、写真提供等、ご協力してくださった方々、ありがとうございました。また、表紙なのですが、本号は写真ではありません。前号までの鮮烈な写真を期待されていた方には申し訳ございませんが、本号より再び、かつて好評であった北駕文庫シリーズを始めることにいたしました。いかがでしたでしょうか。（大石 和久）

人文フォーラム23：2005年 8 月 4 日発行　編集人：大石　和久、栗原　豪彦　発行人：桑原　俊一
発行：北海学園大学人文学部（札幌市豊平区旭町4丁目1-40 TEL 011-841-1161）　印刷：㈱アイワード

表紙、裏表紙：伊勢平蔵（貞丈）『装束着用の圖（男）』（1778 年、巻物、手書き、彩色、37×553㎝、北駕文庫所蔵）

江戸中期の有職故実研究家であった伊勢平蔵（貞丈）(1717 － 1784[享保 2 －天明 4] 年）による、安永 7 （1778）年の「装束着用の絵」。十四種類あり、束帯、五位束帯、衣冠、各前・後、直衣の冬・夏等で衣裳、服飾品の名称を詳細に記してある。現在でも変わらない色合いと優れた芸術に唯々感嘆するばかりで素晴らしい絵巻物である。ちなみに『人文フォーラム』16 号の表紙・裏表紙を飾った女官装束の図も、伊勢平蔵（貞丈）によるものである。（北駕文庫　吉田千萬 記）